

東京外大の世界史

- * 外大世界史入試の出題形式は、全体で大問2題からなり、従来、400字論述を含む第1問、100字論述(最初の2006年度のみ150字)を含む第2問、という内容だったが、2018年度以後、論述問題の字数が変化している。第1問の長文論述は2018年度600字、2019年度・2020年度500字と字数が増し、第2問の100字論述は2018年度30字、2019年度・2020年度40字に圧縮された。2年間、同一字数となっているが、この形で安定期に入ったと決めつけることは、まだできない。2020年度外大入試形式に即した実践的な演習は直前期に行うが、このパンフレットでは、400字演習に加えて、500字演習、及び600字演習素材を解答例とともに入れたので活用してほしい。600字論述演習に関しては、出題傾向・形式は異なるのだが東大入試過去問題4題を微修正したものを入れた。
- * 大問はともに、史料・文献からの長大な引用文章を題材とした出題である。世界史入試が始まった当初(2006年度～)、第1問は90～100行(1行34～36字)、第2問20～30行程度だったが、その後、それぞれ70行前後と、第1問・第2問の引用文書分量が平均化していた。日本史入試が導入された2015年度から、第1問の引用史料・文献が複数化(3～4、2019年は2つ)し、加えて第1問・第2問とも設問文が長文化(6～10行程度、2019年度は4行もあり)し、設問文も論述問題の答案作成に際しての参考対象に組み込まれた。2016年・2017年は引用文章分量が増大し、それぞれ第1問155行と147行、第2問102行と100行だったが、2018年度は引用文章自体は第1問・第2問とも90行前後に縮小された。(ただ、各文章の解説や注が詳しかった。)2019年度2020年度はそれぞれ第1問81行・66行、第2問55行・59行とさらに減り、引用史料・文献に関する解説の分量も少なくなった。長い設問文の形式は継続されている。
- * 2014年度入試では、日本史導入直前ということもあるためか、大学側から「出題の意図及び問題の特徴」「問題作成教員から受験生へのメッセージ」(後ろに掲載)「解答・解説」が初めて発表された。「引用史料・文献」に関連して注目されるのは、「世界の歴史を歴史史料のなかから読み解く読解力や、それを論理的に叙述する力」を重視するという部分である。従来、「引用史料・文献」は、論述テーマの背景を理解するうえで参考になるものではあっても、必ずしも論述内容に直結するわけではなかった。「引用」を史料として読ませ、論述に求められている要素を文章のなかから探らせ、テーマに即して再構成させる、という出題は、14年度入試で初めて登場したスタイルだった。2015年度は史料読解力重視という点は希薄だったが、2016年度以後その性格が強まっている。2015年度から長くなった設問文に関して、2016年度の外大側講評には以下のように記

されている。「(第1問の)問1～問7の問題文そのものが、問8の論述問題を解答するうえでヒントになっています。とくに、問4には決定的なヒントが書かれています。問われているのは、暗記能力ではありません。教科書から学んだ知識を活用して出題史料や問題文を正確に読み解くことができるか。読み解いた内容に依拠して論理的に思考することができるか。そのようにして得られた『答え』を的確に論述することができるか。この3つが問われています。」やや親切すぎる印象すら受けるが、設問文は引用文を読む上で解説となっており、特に論述に関しては最初に設問を読み、それを頭に入れたうえで「引用長文」を読んでいく、という手順は崩せない。

* 15年度から日本史受験が可能となった。世界史受験生にとって、それまでの「近現代の日本史を含む世界史」という出題範囲指定について、「メッセージ」にあるように、基本的なスタンスは変わらないと見てよい。ただ、以後、具体的に単答問題として出題される日本史内容は、例えば山川世界史用語集にはない事項がほとんどである。2019年度の「治安維持法」は記載されているが、2015年度の「津田梅子」、2016年度「野口英世」、2017年「岩見銀山」、2018年「湯川秀樹」「シーボルト」は「常識」とか「教養」に近い知識で、世界史受験生にとって、正直なところかえって準備が難しい場合もある。とりあえず、中学生向け『歴史』教科書の近現代史部分に目を通しておくことを勧める。これらの事項はすべて記載されている。2017年度に「近代建築の父」「ル＝コルヴュジエ」が出題されたが、2016年7月に彼設計の上野国立西洋美術館が世界遺産に登録されたこと抜きには考えられない。(同じく17年に出題された岩見銀山も2007年に世界遺産に登録されている。)2020年度の「アイヌ」出題は2019年のアイヌ新法制定がきっかけだろう。狭い受験勉強に閉じこもるのではなく、現在起こっていることに関心を持ってほしいということだろう。論述テーマとして日本史関連問題は、2006年度・2009年度そして2014年度で、それ以後しばらく出題されていなかったが、2020年度に琉球王国両属問題と沖縄県設置が40字テーマとされた。

* 2008年度・2012年度に史料関連地図問題が出題されている。論述問題以外は、すべて単答記述問題で、正誤判断や記号選択問題は出題されていない。14年度「出題者の意図」で「問うているのは、世界史の基本事項ばかり」とあるが、出題内容・難易度とも私大文系と同程度と考えたほうがよく、2020年度の「ベッサラヴィア」のように差のつきやすい「難問」も少なくない。

* 配点は第1問60点(うち、400字論述20点、600字・500字となって25点)、第2問40点(うち、100字論述10点、ただし、06年度のみ150字で15点。30字になっても10点の配点は変わらなかった)である。単答記述問題に関して、2006年度には4点の設問も存

在したが、2007年度以後はすべて各設問5点の配点となった。2010年度に二つの対になる語句を答えさせ、あわせて5点という設問が3題、2011年度は5題あり、2013年度1題、2014年度2題、2015年1題とそれぞれ出題され、2018年・2019年度にも1題復活し、2019年度・2020年度外大発表解答に複数回答を求められる設問に関して「すべて正解で5点」と注記された。(2016年度は複数解答が必要な設問は1題で各5点計10点の配点、2017年度は出題されず。) 設問数が少ないため単答記述の配点が大きく、1題のミスが大きな得点差となり易いので注意すること。

* 引用史料・文献一覧

2006年度	「清末アナーキスト劉師培の論文」と「ポスト冷戦・欧州統合」
2007年度	「三大陸人民連帯機構へのチェ＝ゲバラのメッセージ」と「キリスト教世界と宗教寛容」
2008年度	「フサイン＝マクマホン協定とサイクス＝ピコ協定」と「ペリー艦隊日本遠征前の国務長官代理書簡」
2009年度	「リットン調査団報告書」と「プラハの春に参加し、フランスに亡命した作家ミラン・クンデラの中央ヨーロッパ論」
2010年度	「コミンテルン—東洋諸民族大会宣言1920」と「ド＝ゴール回想録」
2011年度	「パリ条約(七年戦争)」と「明清交代に関する『華夷変態』及び『和蘭風説書』」
2012年度	「ハルツームのゴードン」と「ウィルソン十四カ条平和原則」
2013年度	「ドイツ三月革命へのチェコ・パラツキーの立場」と「シンガポール、リー・クアンユー回想録」
2014年度	「17世紀後半のフランス商人シャルダンの『ペルシア旅行記』」と「ベネディクト・アンダーソン『比較の亡霊』—東南アジアのナショナリズムを扱った著作」
2015年度	1-A「イギリス外相カニングのブラジル独立問題覚書1822」、1-B「ビーグル号艦長フィッツロイ航海記1839」、1-C「ダーウィン航海記1845」 2「近代アジアのフェニズムとナショナリズム」
2016年度	「イエズス会宣教師3書簡、1699～1703」と「橋本雅一『世界史のなかのマラリア—微生物学者の視点から』」
2017年度	ホセ・デ・アコスタ『新大陸自然文化史』1590年／「フッガー家よりカール5世への手紙」1523年／ベルニエ『ムガル帝国誌』1670年／新井白石『折りたく柴の記』1716年 と 成実弘至『20世紀ファッションの文化史—時代をつくった10人』2007年
2018年度	1-A「アイルランド飢饉に関する新聞記事と挿絵Illustrated London News, 16 January 1847」、1-B「東亜同文書院研究部・北支那飢饉救済の調査」、1-C「ラッセル・アインシュタイン宣言、1955年」 2「秋道智彌『オセアニアの地域史』2000年

2019年度	1-A「陳独秀論集」、1-B「極東勤労者大会1922年/コミンテルン編」 2「リン・ハント『人権を創造する』2011年」
2020年度	1-A「ベルリン条約1878年」、1-B「ユスフ＝アクチュラ『三つの政治路線』1904年」、1-C「T. H. ロレンス『知恵の七柱』1922年」 2「佐々木史郎・加藤雄三編『東アジアの民族的世界』2011年」

幅広いテーマが取り上げられる。設問自体も様々な地域・時代を問う内容の場合がほとんどだが、2011年度は第1問18世紀中心、第2問17世紀中心、2012年は両問とも第1次世界大戦前後中心と、やや時代が限定される場合もある。いずれにせよ、総合力が試される題材である。

* 論述テーマ一覧

	400字	100字(06年のみ150字)
2006年度	「日英同盟からワシントン会議まで」	「社会主義圏の危機」
2007年度	「ベトナム戦争の影響」	「ナントの王令」
2008年度	「パレスチナ問題」	「清朝朝貢体制から条約体制への転換」
2009年度	「世界恐慌から第二次世界大戦までの過程」	「オーストリア＝ハンガリー二重帝国」
2010年度	「ボリシェヴィキ民族政策の転換」	「ウィーン体制」
2011年度	「七年戦争の非ヨーロッパ世界への影響」	「東アジアの冊封体制」
2012年度	「アフリカ分割」	「第一次世界大戦前後のアメリカ外交」
2013年度	「ドナウ沿岸諸民族の自立と国際政治」	「インドシナ戦争」
2014年度	「17世紀南アジア・西アジアのムスリム国家繁栄」	「第二次世界大戦期、日本の東南アジア侵攻」
2015年度	「ウィーン体制とイギリスの経済利害、奴隷貿易とラテンアメリカ独立」	「インド大反乱を契機とするイギリスによるインド統治の変化」
2016年度	「ネルチンスク条約の内容と締結の背景」	「19世紀、欧州列強海外進出における利益追求のあり方の変化」
2017年度	「新大陸産銀の世界交易に与えた影響と、アジアに到達する経路」	「1920～30年代アメリカ社会繁栄の経緯と社会の変化」
2018年度	「歴史上の災害と社会の対応」	「1788年にオーストラリアが流刑植民地とされた理由」
2019年度	「ソヴィエト＝ロシアとアジア諸地域の関係」	「ドレフュス事件概要」
2020年度	「オスマン帝国における住民統合に関する諸思想」	「両属体制と琉球処分」

指定語句が付されているので、まったく書けないということはないだろうが、400字論述では「ベトナム戦争の影響」や「ポリシェヴィキ民族政策の転換」など、求められているテーマに即して全体の文章をまとめるのに、かなりの学力を要求される場合もある。100字論述「清朝朝貢体制から条約体制への転換」(100字)・「オーストリア＝ハンガリー二重帝国」でも、鍵となるポイントをおさえ記述するのはかなり難しい。

当初、論述問題は主に19世紀以降が主な出題対象とされてきたが、2011年度18世紀七年戦争と東アジア冊封体制、2014年度17世紀アジア貿易、2016年度ネルチンスク条約、2017年度新大陸産銀と、近代初期を内容とする出題も目につく。